

〈悲しむ女〉の作り方：テニソンの Mariana と絵画的演出

箭 川 修

講義のタイトルについて：副題の「絵画的演出」という表現には、Tennyson の詩は絵画的な表現方法を志向しているのではないか、ということと同時に、絵画作品における Mariana の描き方をも検討したいという考えが含まれている¹。しかし、本題では「作り方」と表現していて、「描き方」とは言っていない。これは、「描く」が「描写」を連想させ、そこには何か実際に存在するものを「写し取る」というイメージが付着しているためである。例えば（料理のように）素材を用いて、何かを作り上げる、あるいは、捏造する、というニュアンスを込めて、「作り方」と表現した。

さて、今年度の公開講義の統一テーマは「感情」であるが、ここでは喜怒哀楽の「感情」の中から、「悲しみ」を取り上げつつ、「感情表現」は「情景描写」に大きな影響を受けるのではないか、という仮定を出発点にする。

人間の感情は複雑であるが、感情の表象を解釈することも簡単ではない。「悲しみ」と言えば「涙」がつきもののように思われるが、文学作品においても、絵画作品においても、涙は様々な場面に用いられる。悲しみの涙が中心となるのは間違いないが、それ以外にも、喜びの涙、感動の涙、悔し涙、憤りの涙なども存在する。涙という記号は、その環境によって、様々な異なる意味が付与される。作品中で涙が表現される場合、それが説得力を持つかどうか、あるいは、共感を得ることができるかどうかは作品の展

1 本講で取り上げた画家・絵画作品については Appendix [D] を参照のこと。

開が問題になる。また、唐突な涙については様々な解釈の可能性が生じてくる。

涙は文学作品の随所に見られるものであり、Tennyson に特徴的なものではない。しかし、Tennyson の作品に涙が多く描かれていることも事実である。Poem Hunter というサイトで Tennyson の詩から「涙」を検索してみると、Tennyson 作品 180 篇中、単数形の “tear” で 18 件、複数形の “tears” で 44 件がヒットし、その中には Mariana も *Mariana in the South* も含まれている²。

さて、Mariana の検討に入る³。Mariana は Shakespeare の *Measure for Measure* から着想を得ている。Tennyson 自身が作品冒頭に Motto を提示しており、着想の源を隠そうとしている気配すらない。むしろ、*Measure for Measure* を思い出してほしいと考えていると理解されるべきであろう。この中に登場する “moated grange” は「堀に囲まれた田舎屋敷」という意味である。【スライド：moated grange の画像数枚】

Mariana の Motto はこの作品を *Measure for Measure* に接続する役割を果たしているが、Tennyson は *Measure for Measure* を忠実になぞってはいない。*Measure for Measure* には多くの登場人物がいるが、Mariana の登場人物は Mariana 1 人だけである。また、Shakespeare の舞台がウィーンに設定されているのに対して、Tennyson の舞台は、詩人本人の生まれ故郷でもある Lincolnshire に設定されている。Mariana が暮らし、孤独感に苛まれるのは、詩人にとってより個人的かつ親密な環境においてであると言える。

Measure for Measure の中に Mariana というキャラクターがどのように埋

2 Appendix [A] を参照のこと。

3 Mariana のテキストは Appendix [B] に掲げた。

〈悲しむ女〉の作り方：テニソンの *Mariana* と絵画的演出

め込まれているのかも確認しておきたい。名前が出てくるのは3幕1場であるが、そこでの“moated grange”への言及は Tennyson の詩の冒頭の Motto とは微妙に異なる。ならば、Motto は Shakespeare からの引用ではなく、その場면을端的に表現する役割を担っていることになる。Shakespeare で Mariana がふさいだ様子で登場するのは4幕1場であるが、その冒頭に付された Song は Mariana の感情を表現するものと考えられる。しかし、この歌は Boy が歌うものであり、その意味で、既成の悲しみの表現でしかないと考える必要がある。この後、Mariana と修道士に扮した Duke Vincentio が遣り取りを行い、Mariana の口からは、悲しみを紛らすには音楽が役に立つと語られ、Duke も音楽の効用を肯定する。その後、Duke は「ちょっとお願いしたいことがあって、すぐ後でもう一度訪ねてくる」と語り、Mariana は「いつもお世話になっておりますので」と応えて舞台から退場してしまうため、基本的に打ちひしがれた Mariana が登場する場面は以上で終わる。このような素材から Tennyson は想像力の翼を大きく広げ、自らの *Mariana* を造形していく。

Mariana には、様々な具体的なイメージが散りばめられている。1830年に創作されたこの作品は結構評判が良く、それが1832年、あるいは、改訂を経ての1842年の *Mariana in the South* という続編の創作に繋がったことは間違いないが、この作品を絵画的に表象しようとする試みも数多く存在している。もちろん、そもそも Shakespeare が原点にあるという事実が大きな影響を持っていた可能性も強く感じられる。

詩と絵画を直接に繋ぐものとしては、詩集の中の挿絵・版画が考えられる。少なくとも1900年代には立派な挿絵が詩集に含まれるようになった。【スライド：William Edward Frank Britten (1848-1916), ILLUSTRATION TO TENNYSON'S "MARIANA" (1901 [1899]) と Gustave Doré (France, 1832-1883)

and Frederick Simpson Coburn, *MARIANA* (1909)】しかし、Tennyson の *Mariana* の創作は 1830 年であるため、これらはむしろ時期としては遅い。遡ってみると、1850 年代、つまり Tennyson による創作からほぼ 20 年後から *Mariana* を題材とした絵画が現れている。この時期は、1848 年に結成されたラファエル前派 (Pre-Raphaelite Brotherhood) が絵画に新風を巻き起こした時代と重なる。ラファエル前派は Dante Gabriel Rossetti, William Holman Hunt, John Everett Millais の 3 人によって結成された。【スライド：Millais, *MARIANA IN THE MOATED GRANGE*, 1851】 Millais は Moxon 版の Tennyson 詩集にも *Mariana* の挿絵を描いている。【スライド：Millais, *MARIANA*, 1857 (Moxon 版)】これは 1857 年作であるため、先の詩集の挿絵よりは時代としてはかなり早い。【スライド：Dante Gabriel Rossetti, *MARIANA* (1870)】 Rossetti の作品の右奥には楽器を持った男性が描き込まれているため、Tennyson というよりは Shakespeare を題材にしていると思われる。

Rossetti 近辺、つまり、ラファエル前派が活躍した時代には *Mariana* を題材とした絵画がかなりの数が描かれており、それぞれに特徴ある技法や構図で、また様々な道具立てを用いて孤独な〈悲しむ女〉を表現している。【スライド：Hughes, *MARIANA AT THE WINDOW*, 1867 / Stillman, *MARIANA*, 1867-69 / Princep, *MARIANA*, 1888 / Rae, *MARIANA*, 1892 / Harrison, *MARIANA*, 1912】以上のような、*Mariana* にかかわる絵画的表象の多くは Tennyson 作品に含まれる視覚的要素を絵画的に表現しようとしたそれぞれの画家たちの想像力の結果でもある。言語的表象と絵画的表象が互いに接点を求めつつ引き合っている、ということになるのかもしれない。

しかしながら、Tennyson の詩を念頭においてみると、描かれていないものがたくさんあることにも気づかされる。Moated Grange で表現されて

〈悲しむ女〉の作り方：テニソンの *Mariana* と絵画的演出

いた屋敷の周りの「堀」の気配はどこにもなく、基本的に室内のみが描かれている。むしろ、室内に閉じ込められている、という閉塞感が画家たちの中心にあるように思われる。また、Tennyson の場合には効果的に用いられていた auditory imagery にかかわる生物や無生物を示唆するような存在は見当たらない。*Mariana* における auditory imagery は内と外との境界に位置し、外から内へと浸食しようとする要素で、これを拒絶することが *Mariana* の孤独感、あるいは社会からの隔絶を強調していたが、これらが絵画では一切無視されている。

また、言語的表象と絵画的表象には根本的・根源的な相違が存在することも意識する必要がある。それは、言語的表象に不可避の時間的要素である。絵画的表象において、時間的要素を取り込もうとする試みは様々に行われてきたが、それは常に試みに留まってきた。現代であれば、映画の登場以来、時間を取り込んだ視覚的表現手段が様々に、そして、十分に可能になっているが、「絵画」ということに限れば、基本的に無時間的な、空間的な表現手段ということにならざるを得ない。

Mariana の視覚的要素を、かなり即物的に映像化した動画も存在する。【スライド：You Tube：Mariana：Discriptive Images】あるいは、*Mariana* の Promotion Video とも言える動画も存在する。【スライド：You Tube：Mariana：Images with Text】

Mariana in the South という続編の中でどのような image が用いられているのかに触れておきたい⁴。*Mariana in the South* には、単純な朗読を含めてメディアは見当たらないため、テキストのみを頼りにしてイメージを喚起する必要がある。*Mariana* は Lincolnshire を舞台にしていたこともあり、

4 *Mariana in the South* のテキストは Appendix [C] に掲げた。

〈悲しむ女〉の作り方：テニソンの *Mariana* と絵画的演出

風景には寒々しい感じがあった。それに対して、*Mariana in the South* は *Mariana* とは異なる visual imagery と auditory imagery を用い、暑く気だるい風景を描き出す。

先に絵画的表象を検討する。【スライド：Rossetti, *MARIANA IN THE SOUTH*, 1857】Rossetti はこの作品においても室内を描いているのみで、南国のイメージは皆無である。また、Drawing のレベルにとどまっている作品のため、Rossetti がどのような色彩的イメージを持っていたのかについては想像の手掛かりさえない。【スライド：Waterhouse, *MARIANA IN THE SOUTH*, 1897】Waterhouse の作品は女性を雰囲気豊かに描いており、構図としても、足元に手紙を散らしつつ、床の市松模様で遠近法を強調しながら、部屋の奥に開いたドアを描き込むなど、ニュアンスに満ちてはいる。しかしながら、この女性が本当に「悲しんでいる」のかはそれほど明らかではない。【スライド：Cowper, *MARIANA IN THE SOUTH*, 1909】Cowper の作品は気だるさという点では最も出来がいい。女性の足元の犬もぐったりした感じに描かれている。右上の鏡には、南国を表すためにか、緑の葉を持つ木の枝が添えられ、鏡の中には窓の外の（恐らく）光あふれる風景が小さいながらも描き込まれている。

Tennyson の *Mariana in the South* において特徴的なのは、*Mariana* がカトリック教徒になっていることであろう。1, 2 連に出てくる *Ave Mary*, 5 連の *Sweet Mother* は、彼女のマリア崇拝を表していると考えられる。「南」が具体的にどこを想定しているのかは不明であるが、これがイタリアやスペイン、南フランスあたりだとすれば、その土地での宗教はどう考えてもカトリックということになる。

作品の visual imagery は強烈な陽光、また、それを反射する水や地面を描き、暑さを表現する。第 2 連では、“Her melancholy eyes divine / The

home of woe without a tear” という一節が、彼女が悲しみながらも涙を流さない、と語る。第4連では、安らぎを与えてくれそうな「鳥」、「羊」、「雲」などに否定的な形で言及する。こうした表現方法は、人間の常識ないしは常識に基づく想像力を利用しながら、それを否定してみせるという、常套的ではあるが、効果的な手法と言える。暑さにかかわる様々な要素の中で最も端的に特徴的なのは最終連に登場する ‘a dry cicala [cicada]’ 「蟬」であろう。しかし、蟬の声、また、これに伴って海の音のようなものが聞こえてくるところで詩は結末に向かって大きく舵を切ることになる。

この詩の結末について「死 (Death)」を読み取るのは決して困難なことではない。彼女が「一人きり」から脱出することができるのは、天国に行くことによって、というのが妥当な線であるし、6連目から登場する An Image は、別れた男の幻影か、死神かのいずれにせよ、彼女がこの世での積極的な生き方を提案しているようには思えないためである。

Mariana と *Mariana in the South* について対比的にまとめて結論とした。

- ・ *Mariana* の舞台は Lincolnshire の荒涼として寒々しい風景である。
- ・ *Mariana in the South* の舞台は暑く気だるい南ヨーロッパである。
- ・ *Mariana* の Mariana はずっと涙を流している。
- ・ *Mariana in the South* の Mariana は最後の瞬間まで涙を流さない。
- ・ *Mariana* は女性を周囲の環境に寄り添わせることで、つまり、風景の侘しさと女性の侘しさを連動させることによって、〈悲しむ女〉を作る。
- ・ *Mariana in the South* は女性を周囲の環境から浮き立たせることで、つまり、風景の晴朗さに女性の侘しさを対立させることによって、

〈悲しむ女〉の作り方：テニソンの *Mariana* と絵画的演出

〈悲しむ女〉を作る。

どちらの作品が読者に訴えかける力が強いのか、言い換えれば、どちらの演出が効果的なのか、ということに対しては、読者の判断を待つ以外にない。一般的には、*Mariana* の方が評判が良かった、という事実はあるが、最終的には好き好きということになるのかもしれない。個人的には、*Mariana in the South* は、*Mariana* とのコントラストを詩人が意識しすぎたせいか、人工的な作り込みが過ぎるように思われる。

Appendix [A]

<http://www.poemhunter.com/alfred-lord-tennyson/poems/?search=tears&B1=SEARCH>

1. *Ænone*
2. 'And ask ye why these sad tears stream?'
3. *Come not when I am dead*
4. *Dedication*
5. *Demeter and Persephone*
6. *Enoch Arden*
7. *Freedom*
8. *Geraint And Enid*
9. *Guinevere*
10. *Home They Brought Her Warrior Dead*
11. *Idylls of the King : The Passing of Arthur (excerpt)*
12. *In Memoriam A. H. H. : 118. Contemplate all this work of Tim*
13. *In Memoriam A. H. H. : 72. Risest thou thus, dim dawn, again*

〈悲しむ女〉の作り方：テニスの Mariana と絵画的演出

14. In Memoriam A. H. H. : 78. Again at Christmas did we weave
15. Lancelot And Elaine
16. Locksley Hall
17. Lucretius
18. Mariana
19. Mariana In The South
20. Merlin And Vivien
21. Morte D'Arthur
22. OBIT MDCCCXXXIII (Entire)
23. Ænone
24. Of Old Sat Freedom on the Heights
25. Sir Launcelot and Queen Guinevere
26. Tears, Idle Tears
27. The Coming Of Arthur
28. The Defence of Lucknow
29. The Holy Grail
30. The Lotos-eaters
31. The Marriage Of Geraint
32. The Palace of Art
33. The Passing Of Arthur
34. The Princess (part 1)
35. The Princess (part 3)
36. The Princess (part 4)
37. The Princess (part 5)
38. The Princess (part 6)

39. The Princess (part 7)
40. The Princess : A Medley : As thro' the land
41. The Princess : A Medley : Home they Brought her Warrior Dead
42. The Princess : A Medley : Our Enemies have Fall'n
43. The Princess : A Medley : Tears, Idle Tears
44. Tithonus

Appendix [B]

Mariana

Mariana in the Moated Grange.

— Measure for Measure

WITH BLACKEST moss the flower-plots
Were thickly crusted, one and all:
The rusted nails fell from the knots
That held the pear to the gable-wall.
The broken sheds look'd sad and strange:
Unlifted was the clinking latch;
Weeded and worn the ancient thatch
Upon the lonely moated grange.
She only said, "My life is dreary,
He cometh not," she said;
She said, "I am aweary, aweary,
I would that I were dead!"

Her tears fell with the dews at even;
Her tears fell ere the dews were dried;
She could not look on the sweet heaven,
Either at morn or eventide.
After the flitting of the bats,
When thickest dark did trance the sky,
She drew her casement-curtain by,
And glanced athwart the glooming flats.
She only said, "My life is dreary,
He cometh not," she said;
She said, "I am aweary, aweary,
I would that I were dead!"

Upon the middle of the night,
Waking she heard the night-fowl crow:
The cock sung out an hour ere light:
From the dark fen the oxen's low
Came to her: without hope of change,
In sleep she seem'd to walk forlorn,
Till cold winds woke the gray-eyed morn
About the lonely moated grange.
She only said, "The day is dreary,
He cometh not," she said;
She said, "I am aweary, aweary,
I would that I were dead!"

About a stone-cast from the wall
A sluice with blacken'd waters slept,
And o'er it many, round and small,
The cluster'd marish-mosses crept.
Hard by a poplar shook alway,
All silver-green with gnarled bark:
For leagues no other tree did mark
The level waste, the rounding gray.
She only said, "My life is dreary,
He cometh not," she said;
She said, "I am aweary, aweary,
I would that I were dead!"

And ever when the moon was low,
And the shrill winds were up and away
In the white curtain, to and fro,
She saw the gusty shadow sway.
But when the moon was very low,
And wild winds bound within their cell,
The shadow of the poplar fell
Upon her bed, across her brow.
She only said, "The night is dreary,
He cometh not," she said;
She said, "I am aweary, aweary,
I would that I were dead!"

〈悲しむ女〉の作り方：テニスの Mariana と絵画的演出

All day within the dreamy house,
The doors upon their hinges creak'd;
The blue fly sung in the pane; the mouse
Behind the mouldering wainscot shriek'd,
Or from the crevice peer'd about.
Old faces glimmer'd thro' the doors,
Old footsteps trod the upper floors,
Old voices call'd her from without.
She only said, "My life is dreary,
He cometh not," she said;
She said, "I am aweary, aweary,
I would that I were dead!"

The sparrow's chirrup on the roof,
The slow clock ticking, and the sound
Which to the wooing wind aloof
The poplar made, did all confound
Her sense; but most she loath'd the hour
When the thick-moted sunbeam lay
Athwart the chambers, and the day
Was sloping toward his western bower.
Then, said she, "I am very dreary,
He will not come," she said;
She wept, "I am aweary, aweary,
O God, that I were dead!"

Appendix [C]

Mariana In The South

With one black shadow at its feet,
The house thro' all the level shines,
Close-latticed to the brooding heat,
And silent in its dusty vines:
A faint-blue ridge upon the right,
An empty river-bed before,
And shallows on a distant shore,
In glaring sand and inlets bright.
But "Ave Mary," made she moan,
And "Ave Mary," night and morn,
And "Ah," she sang, "to be all alone,
To live forgotten, and love forlorn."

She, as her carol sadder grew,
From brow and bosom slowly down
Thro' rosy taper fingers drew
Her streaming curls of deepest brown
To left and right, and made appear,
Still-lighted in a secret shrine,
Her melancholy eyes divine,
The home of woe without a tear.

〈悲しむ女〉の作り方：テニスの Mariana と絵画的演出

And “Ave Mary,” was her moan,
“Madonna, sad is night and morn;”
And “Ah,” she sang, “to be all alone,
To live forgotten, and love forlorn.”

Till all the crimson changed, and past
Into deep orange o’er the sea,
Low on her knees herself she cast,
Before Our Lady murmur’d she:
Complaining, “Mother, give me grace
To help me of my weary load.”
And on the liquid mirror glow’d
The clear perfection of her face.
“Is this the form,” she made her moan,
“That won his praises night and morn?”
And “Ah,” she said, “but I wake alone,
I sleep forgotten, I wake forlorn.”

Nor bird would sing, nor lamb would bleat,
Nor any cloud would cross the vault,
But day increased from heat to heat,
On stony drought and steaming salt;
Till now at noon she slept again,
And seem’d knee-deep in mountain grass,
And heard her native breezes pass,

And runlets babbling down the glen.
She breathed in sleep a lower moan,
And murmuring, as at night and morn
She thought, “My spirit is here alone,
Walks forgotten, and is forlorn.”

Dreaming, she knew it was a dream:
She felt he was and was not there.
She woke: the babble of the stream
Fell, and, without, the steady glare
Shrank one sick willow sere and small.
The river-bed was dusty-white;
And all the furnace of the light
Struck up against the blinding wall.
She whisper'd, with a stifled moan
More inward than at night or morn,
“Sweet Mother, let me not here alone
Live forgotten and die forlorn.”

And, rising, from her bosom drew
Old letters, breathing of her worth,
For “Love”, they said, “must needs be true,
To what is loveliest upon earth.”
An image seem'd to pass the door,
To look at her with slight, and say,

“But now thy beauty flows away,
So be alone for evermore.”
“O cruel heart,” she changed her tone,
“And cruel love, whose end is scorn,
Is this the end to be left alone,
To live forgotten, and die forlorn?”

But sometimes in the falling day
An image seem'd to pass the door,
To look into her eyes and say,
“But thou shalt be alone no more.”
And flaming downward over all
From heat to heat the day decreased,
And slowly rounded to the east
The one black shadow from the wall.
“The day to night,” she made her moan,
“The day to night, the night to morn,
And day and night I am left alone
To live forgotten, and love forlorn.”

At eve a dry cicala sung,
There came a sound as of the sea;
Backward the lattice-blind she flung,
And lean'd upon the balcony.
There all in spaces rosy-bright

〈悲しむ女〉の作り方：テニソンの Mariana と絵画的演出

Large Hesper glitter'd on her tears,
And deepening thro' the silent spheres
Heaven over Heaven rose the night.
And weeping then she made her moan,
“The night comes on that knows not morn,
When I shall cease to be all alone,
To live forgotten, and love forlorn.”

Appendix [D]

William Edward Frank Britten (1848-1916), ILLUSTRATION TO TENNYSON'S
“MARIANA” (1901 [1899])

Gustave Doré (1832-1883) and Frederick Simpson Coburn, MARIANA (1909)

John Everett Millais (England, 1829-1896), MARIANA IN THE MOATED GRANGE
(1851), MARIANA (Moxon 版 1857), MARIANA (1857), OPHILIA (1852)

Dante Gabriel Rossetti (1828-1882), MARIANA (1870), MARIANA IN THE SOUTH
(c. 1857)

Arthur Hughes (1835-1915), MARIANA AT THE WINDOW (1867)

Marie Spartali Stillman (1844-1927), MARIANA (1867-69)

Valentine Cameron Princep (1838-1904), MARIANA (1888)

Henrietta Rae (1859-1928), MARIANA (1892)

Emma Florence Harrison (1877-1955), MARIANA (1912, Art Nouveau / Pre-
Raphaelite)

John William Waterhouse (1849-1917), MARIANA IN THE SOUTH (c. 1897), LADY
OF SHALOTT (1888)

Frank Cadogan Cowper (England, 1877-1958) MARIANA IN THE SOUTH (1906)

〈悲しむ女〉の作り方：テニスの Mariana と絵画的演出

William Holman Hunt (England, 1827-1910), THE LADY OF SHALOTT (exhibited 1905), THE EVE OF ST. AGNES (1848)

Daniel Maclise (1806-1870), THE EVE OF ST. AGNES (1868)

Ivy Izzard (unknown ; contemporary), MARIANA (unknown)